
連続性の恐怖

dフェイゲン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
連続性の恐怖

【Nコード】
N2443J

【作者名】
dフェイゲン

【あらすじ】

「僕」はビル清掃員。その前は発表しない詩人、そのさらに前は美少女ゲームの原画家をしていた。僕のビル清掃は、少し変な仕事で、いろんな人と出会ったり、話したりする。

1 忘れた詩（前書き）

ライトノベルです。初めてライトノベルを書くので、どうなるかわかりません。内容も、特に決めないで書こうと思います。適当ですね、すいません。少々卑猥な言葉も出てくると思いますが、エッチな意味合い重視ではないので、18禁ではありません。あと、サービスカットのものもあります。最近、ブローディガンを読み直して、とっても面白かったので、影響受けちゃってると思います。

1 忘れた詩

1

僕は清掃員のアルバイトをしている。

おかしな清掃員。

普通じゃない。

僕の清掃範囲はとても小さい。

僕が清掃するのは、ビルの5階だけだ。

毎朝清掃員の服に着替えてビルに行く。

エスカレーターで5階に行く。

5階はいつもがらんだうだ。

誰もいない。

僕はそこをせっせと掃除する。

手が疲れたらやめる。

「手が疲れたらやめていい」

といわれているのだ。

気が利いた雇い主だ。

僕の雇い主は、とても背が高い。

「背が高いと便利なんだ、でも疲れるときもある」
と彼は言う。

口癖だ。

彼は、シンプリー・レッドとアジムスが好き。

お酒はウィスキーを水割りで、煙草はピースだ。

毎朝カレーを食べる。

服はジョセフでしか買わない。

2

5階以外の階のことをまったく知らないわけじゃない。ちよつとは知っている。

例えば、ビルの3階には「フランス現代思想」の研究会が入っている。

彼らは毎日、レヴィナスやデリダやラカンを読んでいる。

彼らはとてもまじめなので、漫画やグラビア雑誌を読んだことがない。

「それで大丈夫なの」

と僕が問いかけると、ヒッピー風に髪を伸ばした若い男は

「心配してくれてありがとう」

と答えてくれた。

「そりゃ心配にもなるよ」

「でも大丈夫、ほら、下を見て」

「下？」

僕は彼の足元を見る。

「もうちよつと上」

あ。

彼の股間はちゃんと起立していた。

「ね。なかなか刺激的なんだ」

「さっきまで何を読んでいたの？」

「ロラン・バルトの明るい部屋」

「今度読んでみるよ」

僕がそういうと、彼はうれしそうに微笑んだ。

3

ビルの2階には病院が入っている。

僕はそこにも顔を出したことがある。

病院には大きな音響装置がある。

コンサート用の音がでかいだけの音響装置じゃない。

鑑賞を想定して創られた、巨大なスピーカーと、真空管アンプだ。

「このスピーカーはタンノイ、アンプはフェアチャイルドです」と、病院の院長はうれしそうに言った。

「そして、今かけているのは、バッハの無伴奏チェロソナタ。カザルスカザルスの30年代の録音、定番です」

僕はあいまいに頷いた。

きれいに化粧をした看護婦が、淹れたての珈琲を持ってきてくれた。

「おい、音が小さいだろ、もっと大きくしろ！」

院長が怒鳴ると、患者の一人が急いでボリュームを上げた。

チェロの低い音がフロアに広がる。

深い幸福感が僕の鼻腔をくすぐる。

「まったく、最近の患者は使えませんよ。うすのろばかりで」

「一日中こうしているのですか？」

「いえいえ、めっそうもない」

院長は心外とばかりに手を振った。

「カザルスばかり聴いているわけがないじゃないですか。昨日はポール・マッカートニーポール・マッカートニーを聴いていましたし、二日前は坂本龍一を聴いていましたよ」

4

ビルの清掃業に身を転じる前は、絵を描いていた。

僕は美少女が好きだったので、美少女のヌードばかり描いていた。

その前は、詩を書いていた。

たくさん詩を書いた。

1000以上の詩を書いた。

政治のこと、生命のこと、宇宙のこと、火と土のこと。

でも、半分ぐらいいは、無意味な言葉ばかりだった。

たとえば

『ぶっ殺すぞ!』

とか

『犯してえ』

とか。

そういうのと、まともな詩との選定をすることがあまりにも困難だったので、僕は詩を書くことをやめてしまった。

5

1000以上の詩のうち半分ぐらいはまともな詩だったわけだが、その中に恋に関する詩はなかった。

僕はいつも恋を困難なものだと思っていた。

それがあまりにも困難すぎて、言葉に出来るとは思えなかったのだ。僕は恋について語ろうとすると口がこわばった。

文字に書こうとすると指が震えた。

僕は、そういった困難について、友人の高梨ユリに相談したことがある。

彼女は長いきれいな髪をかきあげて言った。

「あら、そんなのぜんぜんマシよ。私の兄なんてもっとひどいのよ。そもそも、恋について書こうという気持ちすらないの。そこに考えが思い至らないのよ。はじめから、そんな概念がないの」

彼女の兄は、有名な画家だった。

今はもう絵を描いていない。

獄中で臭い飯を食べている。

彼女の兄は、恋愛や性に関する知識がまったくなかったので、それが悪いことだとは思わずに（性的だとも思わずに）、性器の絵を連続して描いたのだ。

「兄は、欲求に従順だったの」

高梨ユリは、照れたように頬を赤くして、僕にそのことを教えてくれた。

「彼は、性器のことを、美しい画材だと思ったのね」

「君の性器は、描かれなかったの？」

「私のはまだ未成熟だったのよ」

そう。

彼女はまだ幼い。

彼女の見た目は灼眼のシャナのシャナに良く似ている。

というか生き写しだ。

僕は美少女アニメが好きで、シャナにもかなり欲情していたので、高梨ユリがシャナに似ていることには興奮を覚えていた。

だが僕は、彼女に手を出そうとは思わない。

僕は、純粹に高梨幸一（彼女の兄）の絵が好きで、彼女と知り合ったのだ。

「兄の絵がそんなに好きなの？」

彼女の兄がすでに獄中にいることを知って愕然とした僕に、高梨ユリは優しく微笑んでくれた。

「そう。そうなんだ。僕は彼の絵にとっても感動していた」

「そう……」

僕の熱意がうれしかったのだろう。

以来、高梨ユリは、ときどきビル清掃中に遊びに来る。

僕たちは、歌をうたったり、しりとりをしたりして遊ぶ。

6

僕たちのしりとり遊びは、とっても変だ。

僕たちは、語尾をとろうとしない。

「言葉をキャッチアップする必要なんてないの！」

高梨ユリは僕にそう言う。

「そうなの？」

と僕。

「そうよ。言葉を無理に捕まえようとするから、ユビキタスさんは恋愛の詩をかけなくなっちゃったのよ！」

ユビキタスさん、というのは、彼女が僕につけてくれたあだ名だ。

僕が『どこにでもいそうだから』らしい。

「ねえ、『なっちゃった』ってのはおかしいよ。僕は一度も書けていないんだ」

「もう、細かい人ね！でも本当？本当に一度も書けたことがない？」

「ん……たぶん。たぶん、そう思うけど」

僕は気が弱いので、すぐにもごもごしてしまう。

僕はたぶん、一度も恋の詩を書いたことがない。

でも僕はそれを引きずってなんかいない。

だって僕は今、ただのビルの清掃員に過ぎないのだから。

2 大丈夫ですか？

7

日曜日になると雨が降った。

僕は雨が降るといつも珈琲を飲む。

数年前はビールばかり飲んでいて。

体に悪いからやめたのだ。

僕が珈琲を飲んでいると、セキセイインコの『ビートニク』が僕のそばにやってきて言った。

「へへへ、お譲ちゃん、いい体してるなあ」

僕はこのインコに何も教えていないのだが、彼はどんどん卑猥な言葉を覚えてくる。

セキセイインコではなく、セキセイインコウに名称を変えてほしいぐらいだ。

「あら、そうしたら、インコウに変えたらいいじゃない」

高梨ユリに相談すると、頬を赤らめながらもあっけらかんとそう言われた。

「あのね、ものの名前ってのは、簡単に変えられないんだ」

「そうかしら、名前って、全部勝手に決められちゃったものじゃないの？」

「そんなわけないでしょ。あと、頬を赤らめるぐらいなら、インコウとか言うのやめなよ」

「何よ、あなたが先に言ったんじゃない。とにかく、『ユビキタスさん』だって私が勝手につけたんだから。名前ってそういうものよ」

「それとこれとは話が別だよ」

僕はあわてて言った。

「僕のは、君が勝手につけたあだ名。インコは、定められた名称だよ」

「名称だって誰かが勝手に定めたものよ」

「そこには同意がある」

「私とユビキタスさんで同意すればいいじゃない」

「インコウを？」

「そう！」

言ってから、じとっと僕を見て、

「私とあなたの淫行を、って意味じゃないよ」

「わかってるよ」

そんなわけで、僕のセキセイインコはセキセイインコになった。

僕たちは、「インコウのビートニクさん」と彼のことを呼ぶ。

そうすると不思議なことに、彼は卑猥な言葉を覚えるのをやめて、代わりにアレン・ギンスバークやジャック・ケルアックの詩集をそらんじるようになった。

8

確かにこの世の中に、ケルアックやギンスバークがひとつのエスタブリッシュメントを形成した時期があった。

その頃僕はうまれてもいなかった。

僕が生まれた年には、ちょうどロラン・バルトが死んだ。

ロラン・バルトは弟子の車にひき殺されたらしい。

本当かどうかは知らない。

僕はそれを「いしいひさいち」の漫画で読んだのだ。

バルトが道路を渡る。

弟子が車で突っ込んでくる。

グシャ！

「先生、大丈夫ですか」

「ううう、俺はもうだめだ」

それ以来、僕は時々、空を見つめてつぶやくようにしている。

「先生、大丈夫ですか」

誰も答えない。

誰に問いかけているのかもよくわからない。

ところで僕は、ケルアックもギンスバークも、ちゃんと読んだことがない。

9

昨日、喫茶店でウィンナ・珈琲を飲んでいたら、ひとりの女子高生に声をかけられた。

「ちよつと、お兄ちゃん！こんなところで何をやっているのよ」

僕は驚いて、珈琲を噴出してしまった。

「ああ、ちよつともう、汚い」

女子高生の制服にウィンナ珈琲のクリームが飛び散る。

僕は発情しそうになって、少しだけ前かがみになった。

「君が急に変な声をかけるからじゃないか。お兄ちゃんってなんだよ。俺には妹なんていないよ」

「そんなことわかってるわよ」

女子高生は腰に手を当てたままと言った。

「そんなことはわかってるの。でも、あなたのことをとりあえずお兄ちゃんって呼んでみたのよ」

「いったいどういうこと？」

「わからないかなあ、ボクはね、お兄ちゃんを探してるの。いろんな人にこうやって声をかけて回っているのよ。そうしたら、その人がお兄ちゃんだったらちゃんと返事をしてくれるでしょ。あなたはそうじゃなかったみたいだけど」

僕は彼女のしゃべっている内容よりも、彼女の一人称が「ボク」であることに感動していた。

奥からウェイターがやってきて、ため息をつきながら、大きなトン

カチで女子高生の顔を殴った。

彼女は顔から血を吹きその場に倒れた。

「お騒がせしました」

とウェイターが言った。

「こういうことって、よくあるんですよ」

「そうなんですか？」

「ええ。こういう女子高生が、うちの店に来るから困るんです。ゴキブリと一緒にですよ、退治しなきゃならない」

「ちょっとかわいそうだけど」

「そんなこと言ったら、商売上がったりですよ」

「なるほど」

ウェイターは、顔から血を流して死んでしまった女子高生を引きずって奥へ戻っていく。

僕は彼の後ろからついて歩いた。

奥の厨房には大きな川が流れていた。

「きれいでしょう」

とウェイターは満足げに言った。

「うん。きれいだ。なんて名前の川？」

「ステイ・ヴィー・クリークっていうんです」

「へえ」

ウェイターは、よいしょと、と掛け声を上げて、女子高生の死体を河に流した。

「こうやって処理するんです。彼女たちの体には、たくさん二酸化炭素がたまっているので、河の水質管理にはとても役に立つんです」

「この河には河の生物がたくさんいるの？」

「ええ、山女とか、岩魚とか」

「へえ」

「春になると、また見に来てください！きれいなタンポポが咲き乱れていますよ！」

僕は頷いた。

席に戻り、もう冷えてしまったウィンナー珈琲の残りをすすった。

3 それは詩ですか？

10

少し古い話をしよう。

僕がまだ詩を書いていた頃だ。

僕は中学生だった。

僕は幼かった。

僕だけに限らない。

地球すべてが幼かったのだ。

それが今はすっかりと疲れてしまった。

なんて時が過ぎるのは早いのだろう。

正直に言ってしまうおう。

僕が書いていたのは、詩なんて代物じゃなかった。

僕が書いていたのは、言葉になっていない言葉だった。

僕がノートに必死に書き込むと友人たちは僕を笑った。

「おいおい、言葉以前の記号が並べてあるぜ」

僕はそれを罵倒だとは思わなかった。

それは事実だったからだ。

僕は、言葉以前の記号が詩なのだと信じて疑わなかったのだ。

僕は文芸部の連中とも、現代詩研究同好会の連中とも仲が良くなかった。

でも僕はへっちゃらだった。

僕は、僕の本いているものが詩なんだと思っていた。

僕はノート一冊だけを持って、一日に二軒マクドナルドを梯子した。それぞれのマクドナルドで一篇ずつ、「言葉以前のもの」を書き込んだ。

僕はマクドナルドのジュース代に、こづかいのすべてを費やしていた。

寒い冬のことだった。

僕がせつせとノートに「言葉以前のもの」を書き込んでいると、一人の老婦人がそれを覗き込んでいた。

「なんなんですか？」

僕は戸惑って、ノートを体全体で隠しながら問いかけた。

老婦人は優雅に笑うだけだった。

仕方がないので、僕がノートに書き込む行為を再開すると、また覗き込む。

僕は隠す。

執筆の再開。

また覗き込まれる。

隠す。

5回ほどそんなことを繰り返したところで、やっと老婦人が言葉を発した。

「ああ、苦しかった」

僕はぽかんとしていた。

「私いま、窒息していたのよ」

僕には返す言葉が見つからない。

一体何にですか、と問いかけても良かったのだけど、口が震えてしまっていた。

でも老婦人は、思わぬことを言った。

「私、久しぶりに詩を見たわ。それで、つつい驚いちゃったの」
え？

詩？ 僕の書いてるこれが詩なの？

本当に？

「本当よ、本当。私が若い頃に書いていたのとそっくり」

僕は笑顔になった。

まさかそんなことを言ってくれる人がいるだなんて。

「詩を書きあって交換しませんか？」

僕は気がつくど、そんなことを言っていた。

老婦人は、照れたように頷いた。

「いいわよ。でも、もう長いこと書いていないから、書けるかしら」

12

翌日の放課後、僕は白い息を吐き出しながら走ってマクドナルドに行った。

僕は、僕の詩をノートに書きこんでおいた。

渾身の力をこめて書いた詩だ。

老婦人は、先にマクドナルドにやってきて、ダブルバーガーとチキンナゲットとポテトのMを、コーラで流し込んでいた。

「私のは、これ」

古ぼけたノートが差し出される。

「僕のはこれです」

僕もノートを差し出す。

僕は震える手で彼女のノートをめくった。

そして絶句した。

そこには一言

『浮かれてんじゃねーぞ』

と書かれていた。

「え？」

僕は老婦人を見る。

でも彼女は笑顔を崩さない。

「これが詩？」

「ええ。一生懸命書いたのよ」

「そうですか」

「ええ」

「ぼ、僕のはどうです？」

「私と同じね。詩を感じるわ」

僕は、暗い気持ちで家に帰った。

よくわからなかった。

彼女が書いたものと、僕が書いたものは、同じ性質なのだろうか？
いったい、どこがどう似ていたのだろうか？

以来僕は、さらに詩にとらわれた。

詩と呼ばれているものなら何でも読もうと思った。

「そういうの、反動っていうんだぜ」

と、僕の友人が僕に言った。

13

大学生になったとき、僕は僕が書いてきたすべてのノートを庭で焼いた。

それらは火にくべられると、とても悲しそうに僕を見つめた。
でも僕は彼らを助けようとは思わなかった。

「悪いね。こうするほうがきつといいと思うんだ」

僕はつぶやき、指を鳴らした。

僕の後ろ手から、神父が二人出てきた。

僕が呼んでおいたのだ。

彼らは、ピルグリムファーマーザーの名のもとにおいて、それらの魂を沈めてくれた。

一人の神父（浅黒くて体格がいい。風俗が好き）が

「燃やしたものは何が書かれていたのですか？」

と問いかけた。

僕は

「言葉以前のものです」

と答えた。

もう一人の神父（もとバスケットボール選手。今はアイドルマスタ―に夢中）が

「アーメン」

と言った。

僕は、

「あなた方は、言葉以前のものってなんだと思いますか？」

と問いかけた。

二人は口をそろえた。

「そんな恐ろしいこと、口に出せません」

ノートが焼け切ると、僕たちはちよつとしたお祝いをした。

ウィスキーとウォッカを持ってきて、それぞれに5杯ずつ飲んだ。

僕たちは酔っ払い、ジョン・ベリマンとジュゼッペ・ウンガレッティを大声で朗読した。

なんだ。

詩ってちゃんと、存在するじゃないか。

14

「かわいそうな人」

ちよつとだけ同情した声で、高梨ユリがささやいた。

僕が彼女に、僕がかつて詩を書いていた頃の話をしたからだ。

「ありがとう」

と、思い出し泣きをした僕は、鼻をぐずつかせて答えた。

ちいさな女の子に同情されるっていうのは、なんていうか、心が打たれる。

僕がなかなか泣きやまない所以她は水筒に入れた暖かいお茶を一口くれた。

僕はあつたまる思いがした。

「落ち着いた？ ユビキタスさん」

「うん、うん」

僕は頷いた。

「よかった」

僕たちは、いつものがらんだうのビル5階にいる。
今日は外が寒くて、ずっと冷たい風が吹いている。

「ユビキタスさんは、詩を全部焼いちゃったんだね？」

僕は首を振った。

「そうじゃないよ」

「そうなの？」

「うん、僕が焼いたのは、『言葉以前のもの』ばかりさ。詩は焼いていないよ」

「あら？」

高梨ユリが、かわいらしく首をかしげた。

「じゃあ、詩はどこにあるの？」

「詩なんてどこにもないよ」

「おかしいわよ！ つじつまが合わないわよ！」

「どうして？」

「だってユビキタスさん、1000以上の詩を書いたって、前に言っていたじゃない」

本当だ。

忘れていた。

僕はなんて勘違いをしていたんだろう。

「その詩が、『言葉以前のもの』だったの？」

「ううん、違う」

じゃあ僕は、いったいいつどこで、1000以上の詩を書き、それらをどこにやってしまったんだ？

僕は周囲を見渡した。

ただのがらんだうのビルのフロアだ。

「どこかに行ってしまったのね」

と、高梨ユリが行った。

「大丈夫よ。私だって、よく鉛筆をなくちゃうもん。また買ってもらえばいいよ。ちょっと怒られるけど」

ユリちゃん。

残念だけど、詩は買ってもらえるものじゃないんだ。

そしてそれは、鉛筆みたいに簡単に削ることもできない……と思う。たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2443j/>

連続性の恐怖

2010年10月22日00時35分発行